

カンボジア・タイの対立 — プレア・ヴィヒア寺院問題の行方

初鹿野直美

はじめに

タイとカンボジアの関係は、二〇〇八年七月のプレア・ヴィヒア寺院世界遺産登録に端を発した周辺の国境画定問題による対立から急速に悪化した。この三年間、カンボジア政府はタイに対し挑発的な言動を繰り返し、タイ反タクシン

派市民を中心とした過激な行動が繰り返されてきた。この間、何度となく小規模の銃撃戦が繰り返されてきたが、二〇一二年二月四〜七日には四日間に渡って銃撃戦が続き、民間人を含む死傷者が出た。本報告では、カンボジア側からの視点を中心として、プレア・ヴィヒ

ア寺院問題が顕在化した二〇〇八年七月からASEANによる仲介が試みられた二〇一二年四月初旬までの両国の動向をまとめる。今後の行方を検討する。

●タイとの近年の対立

タイとカンボジアは、国境に位置するプレア・ヴィヒア寺院周辺の領有権をめぐって対立を深めている。この地域の国境問題は一九六二年の国際司法裁判所（ICJ）により寺院はカンボジアの領有と判断されたが、周辺地域の国境は未画定の状態が続いていた。この問題が世界遺産の登録を契機として再度注目されるにいたり、五〇年

近く封印されてきた対立が再燃した（歴史的な見解の相違の詳細については、参考文献①、②を参照されたい）。

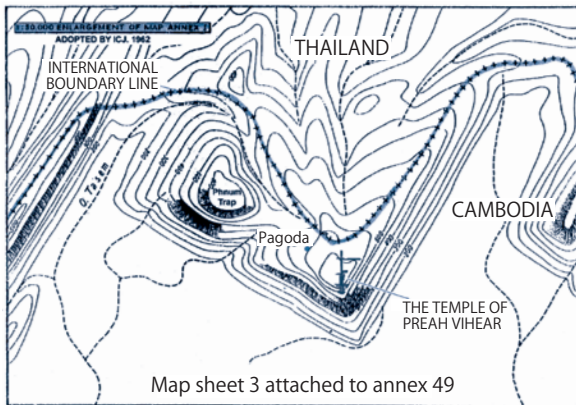
二〇〇八年七月七日、寺院が世界遺産として登録され、カンボジアはこれを国を挙げて祝い、タイはこれに大きく反発した。国境地域は緊張に包まれた。カンボジアは七月末の総選挙に向けてフン・セン首相のもとに、「プレア・ヴィヒア寺院およびカンボジアの領土を守るためにひとつにまとまるカンボジア」のイメージを全面に押し出すことで、国内的なアピールに成功し、与党人民党が大勝した。一方、タイでは、プレア・ヴィヒア寺院周辺の

地図1 カンボジア全体図



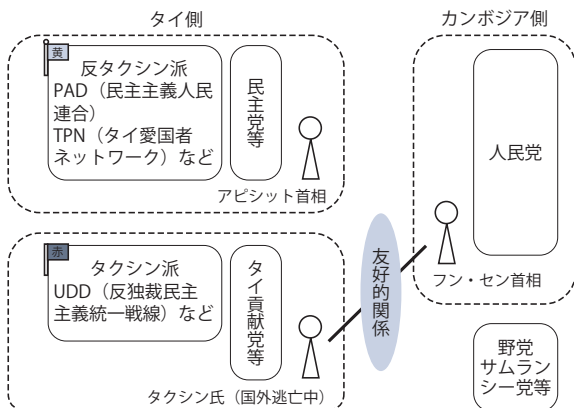
(出所) アジア経済研究所『アジア動向年報2011年版』。

地図2 プレア・ヴィヒア寺院周辺



(注) Pagodaとは、2011年1月末にカンボジア国旗問題をめぐって対立が生じたケオ・シッカ・キルスヴァ寺院のことである。
(出所) カンボジア大臣会議 (Council of Ministers) ウェブサイト。
<http://www.pressocm.gov.kh/>

図1 タイ国内勢力とカンボジアとの関係



(出所) 筆者作成。

表1 カンボジア・タイ国境問題略史

出来事	出来事
1904~1907年	タイ・フランス間でカンボジア国境に関する条約・協定締結。
1950年代	タイ軍がプレア・ヴィヒア寺院周辺に駐留するようになる。
1953年11月	カンボジア独立。
1959年10月	カンボジア、プレア・ヴィヒア問題についてICJに提訴。
1962年6月	ICJ判決。タイは寺院の所有権を留保しつつも、兵力は撤退する。
1991年10月	パリ和平協定。寺院周辺の観光は1992年再開されるが、その後寺院周辺地域がポル・ポト派の支配下に入り立ち入り不能に。
1995年5月	タイ・カンボジアの国境交渉開始。
1998年8月	プレア・ヴィヒア寺院への観光客受け入れ再開。
2000年6月	国境についての覚書締結。
2003年1月	カンボジアにて、タイ大使館焼き討ち事件。
2008年5月	タイ政府はカンボジア政府の世界遺産申請を支持することに合意。共同宣言発表。
2008年7月7日	プレア・ヴィヒア寺院の世界遺産登録、承認される。
2008年10月	武力衝突。
2009年4月	武力衝突。市場焼失。
2009年11月	タクシン元タイ首相、カンボジア政府経済顧問に就任。
2010年8月	タクシン氏、顧問辞任。
2010年12月	タイ国会議員・活動家ら7人、カンボジア不法入国事件。
2011年1月	国境付近の石碑や仏教寺院をめぐって両国間政府の対立。
2011年2月4~7日	武力衝突。
2011年2月14日	国連安保理での会合。両国の外相も出席。
2011年2月22日	ASEAN緊急外相会談実施。停戦監視団派遣の決定。

野党党首のサム・

批判を繰り返している。この対立から、

法がベトナム有利に行われている」と

ナム国境の画定方

われ、野党は「ベト

ベトナムであるとい

の人民党政権は親

現在も、カンボジ

た(参考文献③)。

立を繰り返してき

て、長年激しい対

近い国境線をめぐ

大きな対立は生じ

ていない。ベトナム

とは、一〇〇〇キロ

野党党首のサム・

批判を繰り返して

いる。この対立から、

法がベトナム有利

に行われている」と

ナム国境の画定方

われ、野党は「ベト

ベトナムであるとい

の人民党政権は親

現在も、カンボジ

た(参考文献③)。

立を繰り返してき

て、長年激しい対

近い国境線をめぐ

大きな対立は生じ

ていない。ベトナム

とは、一〇〇〇キロ

とほ、一〇〇〇キロ

近い国境線をめぐ

て、長年激しい対

立を繰り返してき

た(参考文献③)。

現在も、カンボジ

ア和平後、一九九五年に開始され

一九九九年頃から活発な議論が行

われるようになった。一〇〇〇年六

月、タイとカンボジアは国境画定

に関する覚書に署名した。覚書で

は一九〇四〜一九〇七年の国境条約

や合意などを参照しながら国境画

定作業を行っていく旨が合意され

ている。その後、両国は国境画定

については合同国境委員会(JBC)

、安全保障上の問題、越境的犯

野党党首のサム・

批判を繰り返して

いる。この対立から、

法がベトナム有利

に行われている」と

ナム国境の画定方

われ、野党は「ベト

ベトナムであるとい

の人民党政権は親

現在も、カンボジ

た(参考文献③)。

立を繰り返してき

て、長年激しい対

近い国境線をめぐ

大きな対立は生じ

ていない。ベトナム

とは、一〇〇〇キロ

とほ、一〇〇〇キロ

近い国境線をめぐ

て、長年激しい対

立を繰り返してき

た(参考文献③)。

現在も、カンボジ

ア和平後、一九九五年に開始され

一九九九年頃から活発な議論が行

われるようになった。一〇〇〇年六

月、タイとカンボジアは国境画定

に関する覚書に署名した。覚書で

は一九〇四〜一九〇七年の国境条約

や合意などを参照しながら国境画

定作業を行っていく旨が合意され

ている。その後、両国は国境画定

については合同国境委員会(JBC)

、安全保障上の問題、越境的犯

罪などの問題については総合国境

委員会(GBC)を実施し、国境

管理に関するさまざまな問題の話

し合いを重ねてきた。交渉は、二〇

〇八年七月の衝突以降も継続され

てきたが、具体的な解決に結びつ

かないまま、時が重ねられていった。

国境問題が、二〇〇六年以来続く

国内の政治対立の争点として、に

わかに注目されるようになった(図

1)。具体的には、反タクシン派市

民がタクシン派政権に対して、政

府がカンボジア政府による世界遺

産申請を容認したとき、その見返

りに何かの利権を受け取ったので

ないかとの疑いから、「売国的であ

る」として非難した。タクシン派の

流れを汲むサマック政権(二〇〇

八年一月〜九月)、ソムチャイ政権

(二〇〇八年九月〜二月)は、彼

らがカンボジアといかなる交渉・合

意をしようと、反タクシン派市民

からの大きな反発を受けた。さら

に、反タクシン派の立場をとるアピ

シット政権(二〇〇八年二月〜)

ですら、カンボジアと友好的な状

況になろうとすると、同じ反タク

シン派の市民団体からの圧力を受

ける状態が続いた。このため、両国

の対立状態は、三年目に入っても具

体的な解決に向けた歩み寄りか

ぎずに、数カ月おきの銃撃戦を繰

り返すこととなった。

●カンボジアにとっての国境問題

カンボジアは、タイ、ベトナム、

ラオスの三カ国と陸上国境を接し

ている。ラオスとの国境においては、

大きな対立は生じ

ていない。ベトナム

とは、一〇〇〇キロ

近い国境線をめぐ

て、長年激しい対

立を繰り返してき

た(参考文献③)。

現在も、カンボジ

ア和平後、一九九五年に開始され

一九九九年頃から活発な議論が行

われるようになった。一〇〇〇年六

月、タイとカンボジアは国境画定

に関する覚書に署名した。覚書で

は一九〇四〜一九〇七年の国境条約

や合意などを参照しながら国境画

定作業を行っていく旨が合意され

ている。その後、両国は国境画定

については合同国境委員会(JBC)

、安全保障上の問題、越境的犯

罪などの問題については総合国境

委員会(GBC)を実施し、国境

管理に関するさまざまな問題の話

し合いを重ねてきた。交渉は、二〇

〇八年七月の衝突以降も継続され

てきたが、具体的な解決に結びつ

かないまま、時が重ねられていった。

野党党首のサム・

批判を繰り返して

いる。この対立から、

法がベトナム有利

に行われている」と

ナム国境の画定方

われ、野党は「ベト

ベトナムであるとい

の人民党政権は親

現在も、カンボジ

た(参考文献③)。

立を繰り返してき

て、長年激しい対

近い国境線をめぐ

大きな対立は生じ

ていない。ベトナム

とは、一〇〇〇キロ

とほ、一〇〇〇キロ

近い国境線をめぐ

て、長年激しい対

立を繰り返してき

た(参考文献③)。

現在も、カンボジ

ア和平後、一九九五年に開始され

一九九九年頃から活発な議論が行

われるようになった。一〇〇〇年六

月、タイとカンボジアは国境画定

に関する覚書に署名した。覚書で

は一九〇四〜一九〇七年の国境条約

や合意などを参照しながら国境画

定作業を行っていく旨が合意され

ている。その後、両国は国境画定

については合同国境委員会(JBC)

、安全保障上の問題、越境的犯

罪などの問題については総合国境

委員会(GBC)を実施し、国境

管理に関するさまざまな問題の話

し合いを重ねてきた。交渉は、二〇

〇八年七月の衝突以降も継続され

てきたが、具体的な解決に結びつ

かないまま、時が重ねられていった。

●挑発の応酬と雪解け、そして再度対立へ

両国間においては、二〇〇八年一

〇月に最初の銃撃戦がおき、二〇

〇九年四月にはプレア・ヴィヒア寺

院脇の市場が焼失するほどの衝突

が起きた。衝突のたびに、両国政

府は事態の收拾につとめ、拡大さ

せないことを確認してきたが、根本

的な解決にまで踏み込んだ合意に

はいたらずにきた。そのようななか

、二〇〇六年にクーデタで国を追わ

れたタクシン元タイ首相が、二〇〇

九年二月にカンボジア政府の経済

顧問になり、一月、二月に立て

続けにカンボジアを訪問した。す

でタイ国内で有罪判決を受け犯罪

者とされていたタクシン氏につい

て、タイ政府は身柄の引渡しを求

めたが、カンボジア政府はそれを

拒否した。そのため、両国大使が

それぞれ召還される事態に陥った。

その後、タクシン氏の三度目のカ

ンボジア訪問(二〇一〇年一月二〇

〜二二日)や、フン・セン首相夫妻

のプレア・ヴィヒア寺院訪問（二〇一〇年二月六日）など、カンボジアは続けざまにタイを挑発した。これに対して、タイもカオ・プラウィ

ハーン（プレア・ヴィヒア寺院のタイでの呼称）を守ろうと、反タクシン派の市民やメディアを中心として、バンコクや国境地域でデモを行うなどの働きかけが行われた。タイの反タクシン派の多くが「タクシン派がカンボジア国内に潜伏しているに違いない」と強い疑念を持っていたことも、このようなカンボジアへの反発の背後にあったと考えられる。なお、二〇一〇年七月にはバンコクでの爆弾事件の犯人であるタクシン派の男女二人が、シアマリアプに潜伏中であつたところ、カンボジア当局により逮捕され、タイに送還された。ただし、カンボジア政府は彼ら以外のタクシン派の潜伏は否定した。

タクシン氏は、「多忙」を理由として、二〇一〇年八月三日にカンボジア政府経済顧問の職を突如辞任し、それを受けて、両国大使はそれぞれカンボジア・タイに戻った。米ASEANサミット（九月二四日）で久しぶりにアピシット首相とフン・セン首相の会談の場がもたれると、衝突回避への合意がなされ、その後は国際会議の場などで会談する機会も頻繁に持たれるようにな

り、両国関係は正常化への道をたどつたかに見えた。

しかし、関係改善への試みは、スムーズには進まなかつた。タイ国内での反タクシン派が、アピシット政権の弱腰姿勢に反発し、デモが過激化したためである。タイでは、国境に関する条約・国際的な合意が国会の審議事項とされており、一〇月末、国会は二〇〇八〜二〇〇九年にJBCで合意された三つの文書を批准するための手続の途上にあつたが、デモの圧力から議論を見合わざざるを得なくなつた。これ以降再び、両国関係は緊張に包まれることとなつた。

二〇一〇年二月二九日、タイ与党の国会議員であるパニット・ウィキットセート、反タクシン派のなかでもより急進的な立場をとるタイ愛国ネットワーク（TPN）の活動家ウィーラ・ソムクワームキットを含む七人（うち女性二人）が、ポントアイイミアンチェイ州国境から一キロ地点まで不法入国しているところを逮捕され、プノンペンに移送された。プノンペン裁判所は、彼らを不法入国および無許可で軍事地域に侵入した罪で起訴した。また、ウィーラとその秘書であるラートリー・ピパッタナーパイブーンについては、スパイ罪でも起訴した。彼らを除く五人は、一月三日まで

に保釈され、二日にそれぞれ罰金一〇〇万里エル（約二五〇ドル）の有罪判決が出された。彼らは二二日にタイに帰国した。しかし、スパイ罪で起訴された一人については、

二月一日にウィーラは禁固八年および罰金四五〇ドル、ラートリーは禁固六年と罰金三〇〇ドルの有罪判決が出され、プレイ・サー刑務所に拘留された。タイ政府は、七人の行為が明らかに違法であつたことから、当初は「カンボジアの司法システムを尊重する」との立場をとつてきたが、有罪判決に対しては恩赦の可能性を探つた。しかし、カンボジア政府は、ウィーラおよびラートリーに対する厳しい姿勢を崩すことはなかつた。

最初の五人の判決が出た直後、タイ政府は、プレア・ヴィヒア寺院付近にカンボジア軍が設置した石碑を撤去するように申し入れた。その石碑には、「ここは二〇〇八年七月二五日にタイ軍がカンボジア領に侵入し、二〇一〇年二月一日二〇時三〇分に撤退した場所である」と書かれていた。石碑はすぐに撤去されたものの、つぎにタイ政府は、プレア・ヴィヒア寺院近くにあるケオ・シッカ・キルスヴァ寺院の取り壊しとカンボジア国旗の撤去を要求した。寺院は、一九九八年に建立された仏教寺院で、係争区域内

に位置している（地図2）。アピシット首相は、掲げられたカンボジア国旗を降ろすようにと再三繰り返したが、フン・セン首相はこれを拒否し続けた。

プレア・ヴィヒア寺院周辺地域のこのような懸案事項とウィーラ事件とが重なるなか、二月初旬からタイ軍およびカンボジア軍は、国境地域の兵力を急速に増強し始めた。状況の悪化を食い止めるべく、タイのステープ副首相やカシット外相が相次いでカンボジアを訪問し、国境問題等について話し合ったが、二月四日から四日間におよぶ銃撃戦が起きた。カンボジア訪問中であつたカシット外相は、四日夜、プノンペン国際空港にて「なぜタイ軍がカンボジア領に入ったのかわからない」と発言しており、タイ内において政府と国軍との意思疎通がどこまでできていたのかが疑問視された。なお、両国とも「相手が先に手を出した」と主張し、さらには、民間人攻撃についても互いに非難を応酬した。また、カンボジアは「タイ軍がクラスター爆弾を使用した」とも主張している。

●国際社会の介入が、二国間交渉か

カンボジアは対立初期から国際社会の介入、特に国連やASEAN

Nの介入を求めてきた。しかし、タイは二国間で解決すべき問題であるとして、他国の介入を拒んだ。カンボジアが多国間枠組みに執着したのは、二国間交渉が何の解決ももたらさなかったことに加え、「国際社会はカンボジアの主張を認めてくれるはずである」と考えたためである。一九六二年のICJ判決は、独立して間もなかったカンボジアにとって、国際社会に認知された錦の御旗のようなものであった。また、寺院は国連の一機関であるユネスコによってカンボジアの世界遺産として登録されている。ゆえに、自らの主張の国際的正当性が認められるべきと捕らえていた。しかし、タイの反発もあり国際社会の介入はなかなか実現しなかった。

二月四日からの武力衝突を受けて、フン・セン首相は国連安保理に事態を収めるための協力を求めて、書簡を送付した。安保理は、一月四日に両国の外相を招いて会合を行った。カンボジアは国連による監視団の派遣等を望んだが、国連はASEANによる仲裁を提案した。それを受けて、二月二日にジャカルタでASEAN緊急外相会談が開催された。カンボジアは、停戦監視団のみではなく、包括的な問題解決に向けた国境交渉にも第三者がかかわることを求めていた。し

かし、タイの反対により、停戦監視団は受け入れられたが、国境交渉については「二国間交渉にまかされることになった。ただし、その交渉のためのJBCはインドネシア国内で開催されることになり、ある程度の監視下に置かれた交渉となることから、これらの合意について、カンボジア政府は、「我々の勝利である」と評価した。タイ政府にとつても、二国間交渉が確保されたこと、国連の付託を受けたASEANの決定に従うという大義名分により、国内の不安定な状況を収める道筋ができたことから、この合意には一定の評価がなしうるものであったことが推察される。

ASEANにとつて、停戦監視団の派遣やJBCのインドネシア国内での実施といった決定は、これまでの内政不干渉の原則からすると、踏み込んだ内容であった。議長国を担うインドネシアのマルティ外相は、従来から「ASEANはより積極的に地域的な課題や国際的な課題に貢献していくべき」という立場をとってきた。今回の調停においても、二月の衝突後、二月六〜七日にいち早く両国を訪問し、安保理にも働きかけるなど、積極的な動きが目立った。ベトナムが議長国であった二〇一〇年にもフン・セン首相はASEANに介入を求め続け

たが、タイの反対により実現しなかったことを鑑みると、今回の決定におけるインドネシアの役割の大きさを計り知ることができる。なお、両国に派遣予定の停戦監視団各五人はインドネシア国軍から構成され、これは過去に東チモール、フィリピンにASEAN加盟各国のインシアティブによって派遣された停戦監視団のケースと実質的な点において大きな違いはない。監視団は先遣隊が二月末に派遣されたものの、その後はタイ国軍の反発から、実際の派遣にはいたっておらず、その評価は今後の推移を待つ必要がある。なお、JBCについては、当初の三月末の予定から一度延期され、四月七〜八日にインドネシア・ボゴールにて開催されたが、具体的な進捗は見られなかった。

●今後の行方

タイでは、二〇一二年中に総選挙



写真 カンボジアの世界遺産としてのプレア・ヴィヒア寺院を宣伝するために、カンボジア政府が作成している小冊子(2011年3月筆者撮影、参考文献④および⑤)

が予定されており、アピシット政権は対カンボジア外交での妥協が困難な状況にある。一月のASEANの決定には一旦合意したものの、その実施のための国内諸勢力の支持を得られていないのが実情である。今後の総選挙の結果がどうなるのか、国内を二分する勢力がその結果をどう受け入れるのかが、カンボジアとの関係改善において重要なポイントとなってくる。対するカンボジアは、インドネシアのインシアティブによるASEANの協力を頼みにしつつ、引き続きタイの国内情勢を見きわめる状況が続くことになるだろう。

(はつかの なおみ/アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ)

《参考文献》

- ①今川幸雄「二〇一〇」「カンボジア・タイ両国関係の回顧と現状」『タイ国情報』、二月号。
- ②初鹿野直美「二〇〇九」『プレア・ヴィヒア寺院周辺のカンボジア・タイ国境紛争』『アジアワールド・トレンド』、第二〇号、一月。
- ③村野勉「一九九三」「ベトナム・カンボジア間の国境問題」『アジアトレンド』、第四卷(第六四号)。
- ④Council of Ministers [2008] "The Temple of Preah Vihear," Phnom Penh.
- ⑤——[2009] "A Challenge to Thailand's Denunciation of UNESCO and the World Heritage Committee," Phnom Penh.